

## 特集2

# 東日本大震災でのボランティア活動を通して

〔論説〕

## 東日本大震災でのボランティア活動報告

渡邊 洋一<sup>1)</sup>

### はじめに

3月11日午後東日本大震災発生する。そこで筆者は3月中に数回にわたり岩手県の被災地を調査してきた。具体的には、県内の状況を知るために八戸市社会福祉協議会災害ボランティアセンター（担当M氏）に対してヒアリングをした。三沢地区や八戸地区では漁船などへの被害は甚大であったが、他県と比較した場合は、死者も数人に留まるなど数ヶ月のうちに落ち着きそうであると報告を受けることができた。次に、岩手県の被災地の調査を3月から4月にかけて数回実施したが、その被害の壮絶な状態に言葉もなかった。3月から4月の間は、現地の混乱が継続しているために、今後の支援活動を計画し立案することとした。第一として、青森ロータリークラブと保健大学ボランティアサークル・メイトと協働して被災地支援を行う計画を立てることとした。第二として、筆者が主宰する日本コミュニティワーク研究所（松山市社会福祉協議会内）と特定非営利法人地域福祉研究室（川崎市宮前区）に支援の依頼をして筆者がコーディネートすることとした。

特に、被災地での消防団員や民生委員児童委員の殉職の報を受けた。報道によると『総務省消防庁によると、東日本大震災の津波で死亡・不明となった岩手、宮城、福島3県の消防団員計253人（岩手県119人、宮城県107人、福島県27人）のうち、少なくとも72人（岩手県で59人、宮城県で13人、福島県では閉門作業を委託しており、同県浪江町では水門を閉めに行った住民1人が死亡した）が海沿いの水門・門扉の閉鎖に携わっていたことがわかった。川などへの海水浸入を防ぐ水門や、防潮堤の内と外を出入りするための門扉の数は3県で計約1450基とされている。あわせて、同じように民生委員児童委員についても3県で数百人が要支援者を避難誘導の活動において被災した』と報道がある。そこで、第5回フォト心象展（さくら野百貨店）を主催して募金活動することとした。その募金の目的は、今回調査をした被災地の民生委員活動や社協活動へ直接支援す

ることであった。

### 第1 岩手県への調査について

#### 1 岩手県久慈市近辺へ調査

震災発生後、八戸市社会福祉協議会災害ボランティアセンターや岩手県宮古市や山田町を対象として自家用車による調査の結果、この時期には野田町や田野畑村は、ボランティアセンターもたちあがっていない状態であった。また、宮古市田老地区や隣接する山田町の被災状況が厳しいことがわかった。あわせて、岩手県社協と連絡を取り被害状況を把握することに努めた。

4月になると現地の全体的な被災状況が判明してきた、人命救助の非常時から、具体的な支援が求められるようになった。そこで、4月15日（金曜日）早朝青森市発、八戸市社会福祉協議会災害ボランティアセンターを再訪問し具体的な支援計画のためのヒアリングを実施する、現在、八戸市内の避難所には190名が滞在しているとのこと（必要な物資の情報はない4月末閉鎖予定である）。三沢市や八戸市では、県内600隻の漁船が被災の問題以外は落ちつきつつあるとの報告を受ける。

さらに岩手県沿岸部の調査のために八戸社協から45号線で、久慈市社協（久慈市福祉の里）に向かう。45号線は陸前高田市まで通行は可能との表示がある。この間、自衛隊車両とすれ違うことが多い。階上町から岩手県軽米町では、海岸部分の八戸線の線路が流されている（壊滅に近い印象）。住居の多くは高台にあり日常的な風景であるが、45号から測道にて港に降りると漁港はガレキの山がある。この軽米町から岩手県で一部道路に津波地域の表示がある。久慈市の社協事務局に災害ボランティアセンターに到着、事務局長K氏とM地域福祉係長からヒアリング、市内では港湾地区以外は正常になりつつあると説明を受ける。久慈市内の避難所では、避難者は数が減り数百人単位とのことである。4月中旬の時は久慈市では県外のボランティアは募集していないとのこと。久慈市社協事務局からは、隣町の野田村、田野畑

1) 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

Department of Social Welfare, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

村の被災が甚大とのこと、特に隣町の野田村を心配しているとの説明があった。

引き続き、久慈市から国道45号を野田村から普代村の山間部を走るが、久慈市から野田村への道路は山間部で問題はない。しかし、海岸部の野田村役場は被災していて混乱しているために、社協事務局（ボランティアの受け入れ窓口）の場所も不明であったため野田村の避難所を訪問する。混乱しているために様子を見学するとどめ、国道にそって海岸部分を普代村まで走る。かなり瓦礫があり津波の跡が厳しい状況であったが普代村15メートル堤防が健全なことに感動を覚える。ただ普代村役場も混乱しているためにヒアリングはしないこととした。次に、田野畑村の災害ボランティアセンターに到着後、宮古市から山田町の状況を確認した。夕刻となったために、ここで調査は終了して、国道を八戸市に戻ることとした。その後の久慈市社協への電話では、野田村、普代村からさらに、田野畑村、田老地区の宮古市、大槌町、山田町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、気仙沼市と海岸線が甚大な被害を被っているが各市町は、災害ボランティアセンターが立ち上がっているとの報告を受ける。

## 2 調査の結果

次に、4月23日（土曜日）早朝青森市発、八戸市社会福祉協議会を經由して岩手県久慈市社協を再訪する。今後の支援について打ち合わせする。以後5月と6月に調査と支援物品を届けている。普代村は、15メートル堤防が津波を防いで行方不明数名で現在死者の報告はないとのことであった。やはり野田村と田野畑村、宮古市田老地区、山田町への支援が必要であることを確認する。

このような調査から次のような事項を岩手県への支援についての枠組みとした。

- ① 支援の要望は、それぞれ異なり事前の連絡調整は不可欠。
- ② 青森県からの支援は、八戸市から国道45号線を利用して入ることが可能。
- ③ 岩手県社会福祉協議会（担当課長）に連絡して援にあたる場合は、東北道の花巻インターを経て釜石市ルートとなる。
- ④ 岩手県災害ボランティアセンターはホームページ検索可能
- ⑤ 港湾関係の建物ではアスベスト使用があることが予想・要注意（マスク）

被災地での食料・宿泊は自己責任で対応

一部の地域で福島原発の影響が懸念される。

## 第2 保健大ボランティアサークル「メイト」の活動

青森ロータリークラブが予定をしている岩手県山田町への炊きだし支援に学生の同行をしたいとの誘いがある。日程は5月21日を予定するとのことと参加することとした。

2011年5月21日朝4時に大学駐車場からの学生とロータリークラブ会員の観光バスの出発を見送る。自家用車にて、別ルートから岩手県へ向かう（調査しながら山田町へむかうため）、八甲田山の田代平から左へ七戸町役場から国道へ、さらに45号線へ入るために六戸町を抜けていく。八戸市街からいよいよ階上町、その間のJR八戸線は瓦解したままで一部修復工事が始まっていた。

久慈市から野田村へ45号線を走る。国道の山間部は平穏であって、海岸線に出ると湊不部は壊滅、津波の後の生々しい傷跡となっていた。野田村は役場も流失していたために心配をしていたがボランティアセンターが立ち上がっていた。隣村の普代村は、15メートル堤防があり死者をだしていないが港は壊滅状態であって、瓦礫処理がされつつあった。田野畑村は45号からは詳細はわからない。そして、宮古市田老地区は前回と同じ風景で、各所に集められた瓦礫が山になっている。しかも、25度超えた気温のためか不快な臭になやまされる。そして、9時40分に宮古市中心部へ入る。ここから目的地の山田町には山越えとなる。山田町も瓦礫が片付けられ山積みになっている。特に、山田湾の防波堤の廻りは瓦礫とほこりと悪臭がある。小高い丘に役場がみえた。その隣が老人福祉センターで、その一帯は高台のために被災を免れていた。ただ、役場の下住宅は、全壊と半壊が続き、壁に赤い「○」がある家は、取り壊されるようだ。

老人福祉センターに9時55分に到着する。社協事務局に行き情報交換する。その前庭には、すでに学生（20名程度）とロータリークラブ会員がテント設営、津軽おでん、津軽蕎麦の用意が始まっていた。打ち合わせ後に手分けをして、飲料水などの配布を手伝うこととした。また、エレクトーンなど演奏があるためか、他県からの炊き出し支援もあり数百人の方が集まっていた。大変に喜ばれて一同安心をすることができた。午後1時45分には終了して、後片付けをして再び帰路についた。

## 第3 第5回フォト心象展開催

さくら野百貨店の協力を得て、被災地支援のためのフォト展を開催（8月28日から9月4日）した。猛禽類フォトとあわせて被災地の写真の展示などを行い、被災地支援のポストカードを配付して義援金を募ったところ約10万円の寄付金が集まった。その善意のお金は、直接学生と被災地の民生委員活動などに寄付すること

とした。期間中、青森市長やヤクルト社長（ロータリークラブ会長）など多くの方の来訪があり、市関係者やロータリークラブ役員の来訪時に今後の被災地活動の打ち合わせを持つことができた。

#### 第4 支援要請した活動の内容

① 筆者が主宰する日本コミュニティワーク研究会の会員（徳島県三好市社協）が車両二台で、4月13（水）に、花巻インターから遠野市災害ボランティアセンターを経て釜石市災害ボランティアセンターに到着する。同行した入浴車両を釜石市社協に寄付し、あわせて支援物資も寄付する。車両を釜石市の入浴設備がない地域に設置して入浴支援開始する（二泊三日）、使用方法を伝えて4月15日（金曜日）夕刻高速道にて帰路についてたこと、筆者と釜石市で合流する予定であったが余震の危険もあり別行動となる。

② 報告（日本コミュニティワーク研究会会員）

千葉県市川市社会福祉協議会 Y 氏は、4月8日の金曜日から、数日福島県いわき市災害救援ボランティアセンターの応援にあたる。その報告では、『いわき市は報道も増えているようですが、メディアに登場しません。いわき市民は原発事故に起因する風評被害に本当につらい思いをされている。正確な数字は不明であるが、避難者の9割程度は町に戻ってきた。ガソリンスタンドにも並ばずに給油できるようになっていてスーパーも開店していた。一方で、海岸沿いの被害は宮城や岩手の同様の壊滅的な状況であった。災害ボランティアセンターでボランティア活動の応援する人をコーディネートにあたった。具体的には、いわき災害救援ボランティアセンターでは、緊急対応として、いわき方式のアセスシートは大きく分けて2点に分けて支援した。1. いま、困っていること 2. この先心配に思っていること  
この二点に基づいた生の声の要望について、専門職としての医療、介護、福祉の関係者とボランティアとの間の調整をして支援をした』。

③ 報告（山梨県社会福祉協議会 M 氏 日本コミュニティワーク研究会の会員）

4月18日に釜石市より無事山梨に帰った約10日間の活動の報告は、『現地で、自分の目で見て初めて実感する、深刻な状況。探し人掲示板に、子供の写真が張り出されるのを見ると・・・これは、辛い。各市内の避難所回り、ボランティアさんが入れるかどうかの現地調査、生活福祉資金の担当など様々な仕事をさせていただきました。既に、避難所支援より生活支援に力点が置かれている状況。生計を奪われた何千、万もの人達の今後を考えると。この再建は、まさに道遠しです。生活福祉資金（緊急小口）を初めて担当したけど、相談内容が深刻。しか

し「やるしかない」その言葉が凄く印象に残った仕事でした』

④ 報告（松山市社会福祉協議会 S 氏 日本コミュニティワーク研究会の代表）

『4月25日から28日まで、プライベートの活動として宮城県女川町に入ってきた。女川町立病院での事務機器や医療機材等の清掃、片づけに参加しました。現地は想像を絶する状況でした。町立病院や隣接する町社協は海拔18mもあるのに、1階は全滅。社協スタッフは海水につかりながらデイサービス利用者の方々の避難にあたったが、目の前で3人の方が津波に飲み込まれたと報告があった。現在の女川は多くの瓦礫が撤去されないまま、まだ悪臭が漂う箇所もあり、そのような中、桜が満開で、3月11日の津波で漁師の網が桜の木を覆ったままで桜の花びらをつけている状況でした。また、まつやま「Re・再来館」の館長よりの依頼で、絵手紙の会から作品約600枚（作者約70名）を避難所に持参した。女川町社協会長はじめ皆さんに喜んでいただくことができた。以上、走行距離3,157kmのボランティアの旅でした』

その他、日本コミュニティワーク研究会会員による支援活動は継続しており、前記は代表的な報告から筆者としての今後の対応の情報とした。

#### 第5 今後の取り組みと展望

今後の取り組みとして、11月5日には岩手県宮古市田老地区の檜内仮設住宅に、青森ロータリークラブと協働して林檎などを個別に訪問して安否を尋ねることを企画している。あわせて、藤崎町社会福祉協議会と平川市社会福祉協議会にも参加を依頼して林檎の寄付を募っている。この時に田老地区民生委員協議会に義援金（さくら野百貨店第5回フォト展）を渡すことを予定している。

今後、被災地は、冬の厳寒期を迎えてその準備の支援が求められていること、仮設住宅では、引き籠もり対策や病弱な高齢者への対応など慢性的で長期間に渡る支援が求められていること。さらに、生活福祉資金貸付など生活再建への具体的な支援にあたる専門職が不足していること。生計中心者の就労問題や漁業再建が求められていること。このような対応には、行政政策が核となるが、あわせて、学生や市民ボランティアが参加して活動する必要がある。例えば、今後予想される引き籠もり対策には一軒一軒の安否確認のボランティアが必要であり、3月から8月までで三県被災地で約30名の自殺との報道があったが現在増加傾向にあると報告がある。このような対応にも、傾聴ボランティア活動や安否確認ボランティアが必要となっていると考えている。特に、被災地では消防団員や民生委員児童委員の方々の疲労や負

担が多い状況がある。仮設住宅の様子からも、その活動支援の方法を岩手県社協と相談する必要があると考えている。今後も、被災地に寄り添うことをテーマとして本大学のボランティアサークル・メイトの学生と継続した支援にあたる予定である。そのために、青森ロータリークラブとの連携強化をしていくこととした。具体的には、青森ロータリークラブ定例会への参加や研修会の講師を引き受けることとした。さらに、青森県内の市町村の社

会福祉協議会と定期的な連絡を取り合い協働した支援を考えていくことにしている。

このように、東日本大震災の被災地が広範囲にわたり、その被害状況が厳しいことから、長期間にわたる継続的な支援が必要である。したがって、県内の各団体と連携して、筆者が主催する特定非営利活動法人と協働し、情報を共有化して、計画的な支援にあたりたいと考えている。

参考資料（筆者作成の被災地支援のポストカード）



宮古市での活動

